

平成31年白老町議会産業厚生常任委員会会議録

平成31年 3月 4日（月曜日）

開 会 午前10時00分

閉 会 午後 0時10分

○会議に付した事件

所管事務調査

1. 子育て支援の環境整備について

○出席委員（5名）

| | | | |
|-----|-------|------|-------|
| 委員長 | 広地紀彰君 | 副委員長 | 本間広朗君 |
| 委員 | 氏家裕治君 | 委員 | 森哲也君 |
| 委員 | 山田和子君 | | |

○欠席委員（1名）

委員 松田謙吾君

○説明のため出席した者の職氏名

| | |
|-----------------|-------|
| NPO法人お助けネット代表理事 | 中谷通恵君 |
| 健康福祉課子育て支援室長 | 渡邊博子君 |
| 健康福祉課子育て支援室主幹 | 藤元路香君 |

○職務のため出席した事務局職員

| | |
|-----|--------|
| 主 査 | 小野寺修男君 |
| 書 記 | 葉廣照美君 |

◎開会の宣告

○委員長（広地紀彰君） ただいまより産業厚生常任委員会を開会いたします。

（午前10時00分）

○委員長（広地紀彰君） 調査事項といたしましては、所管事務調査として子育て支援の環境整備についてということで進めてまいりましたが本日はお忙しい中、NPO法人お助けネット代表理事の中谷さんにきょうはお越しをいただきまして、子育てふれあいセンターにおける町の委託事業の現状や課題についてお話をいただきたいと思っております。きょうはどうぞよろしくお願ひします。

NPO法人お助けネット代表理事であります中谷氏から説明をお願いいたします。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 本日はこのような機会をいただきましてありがとうございます。まず、お助けネットの活動の概要について説明させていただきます。パンフレットが3種類お手元にあると思うのですが、似たような名前がついていてとてもわかりにくいと思うのですが申し訳ございません。このNPO法人お助けネットという白色の法人のパンフレットをごらんください。私たちの法人の目的はゼロ歳から20歳までの子供の健全な成長が保障される地域社会の実現に貢献することを目的に活動しています。活動当初から子供の育ちというのは乳幼児時期が土台になるということで、乳幼児期の子育て環境それから子供の育ちを、どのようなことをしたら保障していけるのかということ法人にする前からいろいろやってきたのですけれども、少しずつ拠点を持たせてもらえたおかげで対象の子供さんの年齢の範囲も広がりまして、開設して2、3年目くらいからは小学生向けの事業なども結構させてもらっています。赤ちゃんをつれたお母さんが実際にボランティアに来てくださったり、事業に来てくださる中学生、高校生なども含めるとまだまだ未熟ですけれども大分この目的に近づいてきたのかなというところは自負しているところです。

委託事業との関係というところでは、こちらイラストの描いてあるほうを見ていただきたいのですけれども、白老町子育てふれあいセンターを任せてもらって、こういう活動をさせてもらっているのですが委託事業は一番左側の2つになります。委託事業の名前が地域子育て支援拠点事業というすくすくひろば、それからその下のファミリーサポートセンター事業という個人託児なのです。この2つの事業を委託してもらって、すくすく3・9で行っているのですが、そのほかのものは、お助けネットの独自事業ということになります。名前が紛らわしいので、ファミリーサポートセンターと呼んでいただくことが多いのですけれども、それはあくまでも子供さんをお預かりする事業の名前なのです。ここを、まず確かめさせてください。

では、特に町から委託していただいている事業を中心に、どのような活動をしているか説明していきたいのですが、皆さんお手元の資料A3版の2枚あると思うのですが、こちらのお助けネットがどのようにやっているかという概要の部分は子育て支援の全国紙にひろばのことを書いてほしいと頼まれて、つい最近書いたものなので後ほど読んでいただければと思います。

今、委託事業について特に説明させていただきます。まず、すくすくひろばの実施についてで

す。延べ5,000人程度の利用があるということで、これは昨年度のまとめなので今年度まだ出ていないのですけれども、少子化の影響もありまして若干人数は減っておりますが5,000人以上は確保しております。この、すくすくひろばというのは親子でもしくはおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に遊びに来るという場所です。イメージとしては屋根のついた公園ということです。このひろばが全国に大変な数があるのですけれども、よく言われる子育て家庭が核家族で子育てしているところが多いことによる孤立化、そこからくる主に子育てを担っている母親たちの孤立化や負担感、最近の言葉を借りますとワンオペ育児、お父さんたちも気持ちがないわけではないけれども仕事で疲れているなど子育ての経験もないということも含めて、なかなか子育てや家事に参画できないということでワンオペ、お母さん一人の肩にずっしりと子育てがかかってしまっている状態です。それともう一つ、一言で簡単な言葉で言いますとアウェー育児です。ワンオペ育児とアウェー育児が母親の孤立感を深めていると言われていて、アウェー育児というのは生まれ育った土地で子育てできている人の割合が非常に少なくなっている、それは都市だけではなくて地方のまちでも旦那さんの転勤などで血縁、それから小さいときからの友人、知人がいない中での子育てアウェーの土地での子育てこれが非常にふえているという、これが大きな子育て支援の課題と言われてます。母親がなぜ孤立感を持って不安が大きいとだめなのかということなののですけれども、皆さん今とても大きな課題に上がっている虐待、これも私もそれは実感しているのですが、そもそもネグレクトや行き過ぎた体罰などによって子供虐待に至っているというのはほとんどないのです。虐待する親というのは、そもそもないのです。やはり子供を産んですぐはほとんどの親御さんはここからスタートだ、一生懸命やろうと思っているのだけれども、いろいろな要因が絡み合っただけでネグレクトのようになってしまい、どんどん年数がたつにつれ小さいときはさほど差がなかったものが保育園に通わせたらほかの子との違い、学校に通わせてもいつも批判されるという中でどんどん悪くなって虐待に至るということです。そこにはもちろん大きく世代の連鎖の貧困問題もあります。ただし貧困があるから虐待があるというわけではありません。すごく一生懸命子供に愛情を注いで育てていらっしゃる一生懸命頑張っている方もいます。そこに一生懸命頑張る気持ちがあるのだけれど、なかなかできないところに孤立を防ぐような手だてがあることで母親を中心に養育者が少し余裕を持って少し前向きに少し元気になることによって子供が育つ環境が整うということです。就学前は特に家庭が一番の子供が育つ環境ですから。そこをどうやって充実させるかというのが本当にいつも一番考えているところです。これについては私も30年来ずっと考えてきたので話し出すとこのように力が入ってしまいます。それで、その一つの手だてとして特にアウェー育児の方などは、まずは引っ越してきて子供を産んで友達がほしいといったときに、誰でも行ける場所これが大事ということで、すくすくひろばの役目があるのです。先ほど言ったような人数、どんどん少子化は進んでいますけれども、あまり変わらず推移している。週5日開けているのですが、少し注目してもらいたいのが月曜日の午後だけゼロ歳児の赤ちゃん連れの人だけに開放している時間があるのですけれども、ここにグラフが書いてあるのです。ここから読み取れるのがゼロ歳児を持つ母親の8割近くが一度は広場に来てくれているということなのです。よく言われるのはそういうところに出てくる親はいいよねというような言い方とかあ

と思うのですけれども、足がなくてもはいろいろ工夫してそれくらいゼロ歳児を育てている親というのは誰かとおつながりたい、情報が欲しい、少し話を聞いてほしい、子供にも自分にも友達がほしいという気持ちが強いということなのです。ほかの子供の年齢で、もし輪切りにしたとして、ほかのどのような集まりでもこれだけ親が自分から出てくるというものはあるでしょうか。ですから、乳児期の親に対して助けを求めているわけですから、そこに必要な支援を届けるというのはすごく大事なことだと思っています。それが、ひろばの一番私の伝えたいところですよ。

先に委託事業のことなので右側のページもごらんください。今度は託児部の部分で委託事業のファミリーサポートセンター事業についてです。平成29年度は依頼実施件数が約1,500件弱でした。これはことしで12年目になるのですけれども、今年度も実施件数が1,300件以上はいきそうです。同じくらい延べ件数であるということです。60人と出生数が少ない白老で1,500件も少しびっくりされると思うのですが、決して親御さんがこういうのがいいから預けちゃえということで預けている人は誰もいません。これは12年間、またその前もお助けネットだけでやっていたから、託児を20年くらいやってきてこれは言えます。遊ぶために利用したケース、全くありませんので。せっぱ詰まって利用されているわけです。預かり実人数というのが1,400件のうち、預かりの実人数で300人くらいいます。ただし、1回か2回しか利用していないという人もかなりいます。兄弟で利用するので一家庭利用すると2人、3人というカウントです。継続的な依頼というのが10件ほどありまして、ここが1週間のうち一番多い家庭でしたら月曜日から金曜日まで毎日という家庭もあります。どのような家庭が利用しているかということなのですけれども、一番多いのはひとり親家庭です。ひとり親家庭の利用がこの延べ件数のうちの半数ぐらいになっています。それは、どこの数字で見取れるかというと町助成使用者と書いてあると思います。継続的な依頼10件の隣に町の助成使用者と書いています。これが17人。この17人のほとんどがひとり親家庭になります。この17人で延べ700件ですから。助成の内容は非課税世帯それから生活保護世帯、ひとり親世帯に5年前から助成をいただいております。この助成があることによって確かに依頼件数も少しふえましたけれど、それがなくてもひとり親家庭の人は以前から半数以上占めていました。なぜかということ子供が少し調子が悪いということで、1日いいところであれば2日は休めますが、3日目休むと職場でもう来なくていいよという雰囲気になってくる、大変なのです。それから朝早く出る、夜の保育園の預かりが終わってもまだ延びる、こういうようなことがあるので私も行っているのですけれども朝、子供さんの保育園への送迎、それと帰りの保育園から少しの間おばさんの家で預かって、そしてそこに親が迎えに来るというすき間の利用が非常に多いということです。また軽度の病児保育も行っていますので、先ほど言ったように2日は休めるけれども3日目からは休めないというようなときに、いろいろ条件はありますが見させてもらっています。この病児保育もやっている側の提供会員さんの善意に支えられているわけですが、ファミリーサポートセンターというのは、やってくれる人がいないとやれない制度ですから。大概は断らないでなんとか引き受けてやっているということですよ。

あと質問があれば後ほど受けたいのですが、ちょうど今週末、実は私の身近な方で子供の同

級生ありがたいことに白老に住んで子供さんを授かってくれました。それが双子だったので。その親御さんのところに私、町内会の班長なので会報を届けたのですが、そのときにまいったということで毎日サポートにお母さん入られているのですが、お母さんが膝の手術をしてすぐなのです。だから自分の体もぼろぼろ、だけど双子だからどうしようもない。この助成も受けられないから、例えば5時間私たち伺わせてもらったら双子、1人目30分300円、2人目150円、30分で450円です。1時間900円なのです。5時間伺ったら4,500円、交通費入れたら4,600円、4,700円になります。パンフレットを渡してどうしてもものときに使ってと言ったけれど連絡は来ていませんでした。つまり父親が払おうと思っても、なかなか難しいということなのだと思います。これから先、もっとしんどくなったらもしかしたら利用があるかもしれない。何とか1カ月ぐらいとか双子だったらもう少し長いでしょうけど、本当に大変な時期があるのです。産後すぐの1カ月ぐらい、みんな親族の手助けあると思うのですが、ない人もいます。親御さんにそういう力がなくてとか親と縁を切ってきたというような人もいます。その要件というのが難しいとは思いますが、このファミリーサポートセンターにつながってくれる人というのは本当に大変なご家庭が多いので、私は目に見えないけれども経済的な支援の一角になるかもしれませんけれど、子育てをして本当に大変なときの支援にこのファミリーサポートセンターへの助成ということになるのではないかなとスタッフと話しているところです。

私たちいろいろ、その後スタッフの熱意で小学生向けの事業なども発展しまして今は月に2、3回、小学生向けの放課後の遊びなどもやっています。自然遊びから、みんなでコミュニケーションをしてできるような遊びなどもしていますが、去年、ことしと少し参加者が減ってきています。残念であんなに楽しみにしてくれていた子が来てくれないなというのをスタッフ少し気にして聞いてみますとゲームに夢中というところです。ここは非常に難しい問題です。私もメディアのこともずっとやっていますが、あれ以上子供をわくわくさせる刺激的な遊びというのが中谷さんもっと楽しいことをやればいいじゃないと言われますが、無理です。あの大興奮してやっている、ただしやっている今、一番白老の小学生の中高学年の男子のやっているゲーム皆さん知っていますか。ゲームの名前です。フォートナイトというバトルロイヤル系のオンラインゲームなのですが、このフォートナイトというのは15歳以上が利用規約には書いてあるゲームです。どうして教育的な配慮でいろんな拘束がある中で、きちんとゲームの年齢制限があるのにそれをやったらだめだと、どうしてきちんとできないのでしょうか。これは私がすごく強く思っているところです。何歳以上の人はしないほうがいい、それは発達段階でそうなのだとされているのに、なぜかインターネットやゲームのことになるとゆるゆる、ゲームやインターネットの産業がこれからの日本の大きな産業になるのはわかっています。だけど、それと小学生でも夜の9時、10時までやって睡眠する時間が11時や12時になっている子もいる、家庭の教育力で抑えられないから家庭が悪いのだと押しつけるだけでいいのでしょうか。もっと教育として義務教育の内容をしっかりと子供たちに身につけさせるために親への啓発はもちろんですよ。楽しいことをしてあげることもちろんですよ。でも根本的にこれはだめだよということも私は言っていないとだめだと思っています。そこに意識のあるいろいろな団体や大

人が言っていくと言うこと絶対必要だと思っています。最後はお助けネットからずれたと思うのですが、子供の健全な成長発達にとって、そこは看過できない問題なのではないかなと思っていますところ。

最後に、ことしで12年目になるのですけれども、白老町子育てふれあいセンター、最初行政の人と一緒に計画の段階からつくらせてもらって、私たち勝手な手前みそで自分たちでやっているという気持ちでやらせてもらって本当にありがたく思っています。当初、施設が古くて5年たったから見直そうということだったのですけれども、いろいろな諸般の事情がありましてなかなか難しく、どうにか違うところというようなこともやむを得ないということも思っていたときもあるのですが、これからご議論いただくことと思うのですが、スタッフそれから利用者さん一同、あそこの環境がとても子供にとっていい、先ほど言ったように子供の健全発達にとっていいということで、みんなどうにかやっていきたいと思っていますところですので、何とぞご理解、ご支援いただけると大変ありがたく思います。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事、大変お忙しい中きょうお越しいただきまして和やかな中にも熱い話もありまして、今後は委員の皆さんからの意見交換や質問等々の中でいろいろなことさらにお教えいただけたらと思います。

それでは早速なのですが、各委員からの質疑をお受けしたいと思います。質疑のある方はどうぞ。

山田委員。

○委員（山田和子君） 山田です。きょうはありがとうございます。軽度の病児のときに預かってくださる方というのはスタッフさんではなくて地域のご自宅に預かっていると認識しているのですが、ボランティアなのかどういう立場なのかをお尋ねします。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 託児の仕組みがこのファミリーサポートセンター事業になります。私たちは正会員45名ほどで毎年活動しているのですが、年に一度子育て支援サービス講習会というのを実施して、それを受講して会の趣旨に賛同してくれた人だけがお助けネットの正会員になって活動していただきます。それは同時に希望すればファミリーサポートセンターの提供会員にもなれるということです。ですから、ほぼ45名中40名近くはファミリーサポートセンター、託児をする提供会員として登録してくれています。この中から病児託児の依頼があったときに、してくれる人をコーディネーターが探していいよと言ってくれた人が受け持つということです。40名中ほかの仕事をしている人が30名以上です。今は30代、40代、50代は特に子供さんの教育費などかかりますのでほかの仕事と兼務しています。ファミリーサポートセンターの提供会員として活躍してくれているのが50代、60代です。そのときそのときに病児のほうも50代、60代の提供会員さん昼間ですから、やっています。

先ほど、言い忘れたのですが、いいことばかりではなくて課題もありまして、提供会員が数的には45名前後で全く減らないのですが昼間、ファミリーサポートセンターの実際の活動ができる人というのは減っています。それは50代、60代が今度、親の介護それと孫の世話などにより以前よりも活動する時間が減ってきているからです。ということで提供会員の確保はこれか

とというところが強まっているのかなど。これは悪いことではないです。ただ、それで提供会員になる、提供会員は有償ボランティアなので。ものすごく準備して組んでもキャンセルになることもありますから。仕事としては成り立ちませんから。ですから家族とか家庭の時間を大事にしつつ、収入もやればあって、そして地域に貢献したいという気持ちの人がこの提供会員になられますので、そういう意味では難しい。ですから例えば病児のほうを、もっと確保したいといったらもう少しプラスアルファの部分ですとか、日曜日にファミリーサポートセンターでやってくれる人にはプラスアルファの部分ですとか何かしら考えていかないと、なかなか提供会員の安定確保というのは難しいのかなと思います。

○委員長（広地紀彰君） 山田委員。

○委員（山田和子君） 山田です。町内会の役員というのも提供会員さんが集まらない悩みに類似しているなど思っているのですけれども。社会貢献とか地域貢献とか、そういう意識がある方がふえていくような、生涯学習的な啓蒙、啓発というのはこのところしばらく白老町でもあまり積極的に行っていないのかなと感じているのです。昔の100人会議ですとか、あのあたりだと本当に協働のまちづくりという意識が全町にあったと思うのですけれど、それが一時途切れて個人的な生活を重視する方が、それは全体の教育のあり方もそうだったかもしれないけれど、私たち40代、50代とかの世代というのは自分たちの生活をよりよいものにして、それで楽しければいいじゃないみたいに育ってきたように感じるのです。そういったあたりの生涯学習のあり方をもう一度見つめ直して、地域貢献、社会貢献という意識が結局クオリティオブライフを高めることになったり、健康増進につながったりするのだよというような啓蒙をしていく必要があるなどということを感じているので、そのあたり中谷代表はどのように感じるかなということをお聞きしたいと思います。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 山田委員が言われたとおりだと思います。確かに社会全体が収入を得なければ価値がないというふうには大きな流れ的にはなっているのだけれど、私もそうだったように人一倍欲深い人間なので、どうしてこのようになってきたのかなと思ったら、やはり学習してきたというのはひとりだけではなくて人と語り合ったり、語り合うことでできるかと思ってやってきたことが多いので、全てわかっているわけではないのですけれども白老にそういう場が少なくなっているのかなというのは10年ぐらい前から感じていたところなんです。なので例えば育児サークルの親御さんと波はあるのですけれど、議員さんが話す場を先日設けていただいたときに、そのあとほかの場所でもみんな盛り上がっている話しているのです。なので、意見を言いやすい場所、それから新しい手法というのも大事だと思うのです。懇話会とか前に誰かがいて、そこで意見を言うというのは私みたいによほど変わった人ではないと難しいと思うので、すごく堅いテーマでいいのだけれどももっと話せる、それから仲間内のところに出向くとか、そういうような工夫によって学びながらこういうことができるのではないかなというような生涯学習的なことは必要なのではないかなと思います。あと、どうしても子供の教育費とか老後の不安ということで30代、40代、50代がなかなか時間が取れないというのは年々進んでいます。ですから逆に60代、70代をもっと若々しくして、その新

しい生き生きとした生涯学習的な、そして貢献していくというようなものも、もっと盛んにしていきたい、今までと違う見せ方、参加の仕方みたいなものがあるといいかなと思ったりします。

○委員長（広地紀彰君） ほかの委員から質疑のあります方はどうぞ。

森委員。

○委員（森 哲也君） 森と申します。よろしく申し上げます。先ほどファミリーサポートセンター事業のほうの提供会員さんの担い手の現状のほうは説明いただきわかったのですが、すくすく広場のほうも延べ5,679名と多くの利用されているということで、こちらのほうに常勤スタッフ1名、サブスタッフ21名と書かれていますが、担い手の現状の説明をいただけたらと思います。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 実は私たちそこも悩みでして今、熟練の常勤スタッフが1名でほぼ広場を対応しつつ、サブスタッフ21名というのは1日2時間程度を有償ボランティアみたいな形で入り、その2時間程度を常勤スタッフが事務仕事をするということになっているのですが、本当は地域子育て支援拠点事業という国の規定では常勤スタッフ2名となっているのです。このひろばだけで。ただ、そこは一番最初のスタート時に町の財政ですとか、いろいろなことを鑑みて自分たちもひろば1名、ファミリーサポートセンター1名でお受けしてやってきたところなのです。できれば、熟練のひろばの常勤スタッフから次の世代の常勤スタッフを育てるにあたって、もう少し手厚く賃金を上げれることによって補完してやっていって、すぐには熟練にはなれないので移行していけたらなという私、代表としての思いであります。というのは本当に子育て支援全般そうなのですが、スタッフの質というのがすごく大事なのです。ただ来て気をつけて遊んでねと見守っているだけでは、これだけ8割の人が一度は行ったり、そのあとつながるということにはならないのです。ほかのまちから見ても。人と人をつなぐのが一番の常勤スタッフの役割で、子供への対応の仕方も学んでいかなとなかなか難しいことなので、力をつけていただくという意味でもスタッフを確保できるような体制を整えていきたいなとは思っています。

○委員長（広地紀彰君） 森委員。

○委員（森 哲也君） お話聞かせていただいてありがとうございます。スタッフの説明のところで訪問型支援員や保健師との連携の成果でふえてきているというところ詳しく聞きたいと思います。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） まずは保健師さんとの連携というところですが、保健師さんがたくさんの新生児からはじまって訪問などもされています。それから検診でも。保健師さんも十分に相談にはのっているのだけれども、もう少し日常的に人とつながったほうが良いなというような場合、ひろばに特段、保健師さんが力を入れてつなげてくださるという場合があるのです。ただ、パンフレットを渡して、こういうところもありますよでは終わらず、今まで数件なのですけれども、お母さんの困り感が多い場合はひろばまで保健師さんがつき添って1回目のときは来てくれるということもしています。そしてそのひろばのスタ

ップとつなげて手続きの仕方なんかも、そうするとお母さんにとって安心されます。それから訪問型支援というのは全く別の事業で、子育て支援室の訪問型家庭支援事業なのですが、それは希望があったところに訪問支援員が訪問して相談にのったり情報提供するという事業で、年間40件から50件ありましてこれも10年近くの事業になります。実はこれ文部科学省からの補助事業なのですが、学校に上がってからの親御さんからの相談はほとんどありません。それは全国どこもそうみたいです。やはり乳幼児期の相談が多いということで行っている事業で、この訪問型で相談のあった人をこのひろばにつなげるというような連携があるということです。

○委員長（広地紀彰君） それでは、ほかの委員で質疑のあります方はどうぞ。

氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 氏家です。きょうは、お忙しい中、本当にありがとうございます。私のほうから1点だけ。中谷さんにとっては話しづらい部分あるかもしれませんが、皆さんがお聞きしたことと重複するようなお話をしても仕方ないので、私の考えている子育て環境というのを議会の中でも相当いろいろ議論はされることあるものですから、今後ますますふえるであろうと。31年度予算の中で今まで課題であった環境整備というか、すくすく3・9の環境が少しよくなったということでお伺いしておりますので、これは本当によいことだなと思いました。これは、あの場所が将来的にこれから10年、15年はある一定のお金をかけて活かしていくのだと思いますし、私は議会の中でもお母さんたちと懇談をさせていただいたときに、あそこの環境がいいのだということとそういう話を聞いて、これは一つのいい落ち着きをみたなと思ったのですけれども。将来的な白老町のあるべき姿みたいなところを考えると、例えばこの役場庁舎見ても相当、老朽化していて災害時に一番先に崩れてしまうのではないかというような建物であったり、例えば図書館もそうです。私たちもいろいろな場所を見に行くと役場庁舎そして図書館そして子育てのそういった環境施設、そういったものが複合的に成り立っている。お母さん方がもっともっと集まりやすいというか、そういった環境が今後やっぱり少子化も含めて人口減少も含めて、まちにとってのビジョンとしても必要なものなのかなと思ったりして議会の中でもいろいろ議論するのです。今後、中谷さんの考え方の中で子育ての複合施設での環境整備というか、これは15年、20年先の話になるかもしれません。そんなに簡単に建てかえられたりするものではありませんから、今の財政状況から見て。でも、中谷さんが将来思い描く白老町のビジョンというか、そういったものが頭の中にあればお聞きしておきたいと思っています。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） おっしゃったように私も氏家委員と同じ思いがあります。いろいろな機会にほかのまちに行かせてもらうことがあって、本当に役場の庁舎の古さと図書館のほかのまちの立派さ、そこは白老の人口規模が少しあったばかりなのか。本当にかわいそうだなと思います。10年ぐらい前までは、ただの夢物語で子育て支援施設が図書館と一緒に文化ホールみたいなものと一緒になってあったら素敵だろうなというのがありました。今、自分たちがすくすく3・9でさせていただいているから思うのかもしれませんが

んが、一方でやはり障がいを持っている障がい児者がふえているというのか、そこもすごく思っていますし、病院もあそこありますし、障がい者関係のいろいろな施設もございます。子育てをしている親御さんたちが多様な世代の人や多様ないろいろな個性を持った方と日常的に交わるというのもすごく大事なことだと思うので、あそこがそういう福祉的な地域子育て支援拠点も第二種福祉施設なのです。数年前に児童福祉法が改定になって第二種になったので、健康福祉ゾーン的なところになっていけばいいのかなと、大げさなことでもなくてもいいから自然を生かした公園と、よく親御さんの要望で出ます。その子供の発達にいいような公園兼いろいろな世代の人、いろいろな人たちがゾーンで病院にも行きつつ、私たちだって年をとったら障がいを持ちます、そういうような人たちも集えるところがあったらいいなというふうにも思います。ただ図書館の可能性というのも本当にすごいものがあると思います。先ほどゲームのことインターネットのことスマートフォンのことでもありますけれど、では子供たちにどのような力をつけさせたいのだというときに、図書館が核になった教育的な効果というのか、それはものすごい大きなものがあると思うし、図書館のソフト事業はたくさんしてくださっていますし、そういうところも、もう少し発展性があったらいいなと思うこともあります。

○委員長（広地紀彰君） 氏家委員。

○委員（氏家裕治君） わかりました。私たちはいろいろなところを見て歩くと複合施設という物事の考え方が一つのもので考えてしまう。ですから、中谷さんが言われたとおり障がいを持った方々が集いやすい場所、いろいろな多面的な面でも集いやすい場所を確保したいのだというゾーンのあり方みたいなものが、確かなるほどなど自分たちの目で見ると、そういうものを活用したいという人たちがどういったところを求めているのかということも含めて考えなければならないのだと改めて思いましたけれども。一方で、図書館を核としたゾーンのあり方というのも、私もたまたま読み聞かせの場面を目にすることが多いものですから、そうすると中谷さんが先ほど言われたゲームに集中する子と、おばあちゃんたちが読む読み聞かせの中に子供たちが目を光らせておばあちゃんたちに寄っていくあの姿にすごくギャップがあるのです。でも、そこをしっかりと育てていかないといけない。白老町においては読み聞かせのグループが結構、数がたくさんあってそういったところがうまく今後も活動を続けていっていただいで将来的には図書館を核とした読み聞かせの文化だとか、そういうものを白老町らしさとして残せていけたらいいのかなと思ったりもします。いずれにしても現場で活動している、中谷さんたちのそういう活動を通して、私たちもしっかり考えていかないといけないなと思いますし、一番大事なのは女性の目線から見たものがそれが現実になっていくのが大切だと思うのです。私たちどうしても男性の目で見ると頭の中で物事を考えてしまっていて、複合施設といった複合施設その一つのものの中に全てが集まることが一番いいのかなと思ったり、でも女性の目から見ると違った目線というのかあるのかなと。これも、ここではあまりいい発言ではないかもしれませんが、議会の中に14人いますけれどもせめて4、5人は女性の議員がいてこういう議論が深まるとももっともいいのかなと思ったりもします。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 私の本当にただ頭の中で考えている今ま

での経験から、そういうことも質問いただいておりますので、とてもありがたく思いました。とても少子化についてこの5年くらい気になって気になってしょうがないというのが私たち子育て支援にかかわっている者たちみんなの思いで、同じ人口規模のところから見ても最も減りが激しいです。そうすると来年の国立アイヌ民族博物館開設前後、ここがやっぱり一つの勝負時ではないかなと勝手におぼさんたちみんなで何かやれることないかみたいになっているので、何かしら生かしてもらえるようなことができたらいいのかなと。また、そんな人任せなことってないで本当は自分たちからも発信したほうがいいのかなとか思うところです。ぜひ、気軽にまたうちの施設なんかにも来てもらって私以外のもっと親御さんの話を聞いているいいスタッフがおりますので顔を見て聞いていただければと思います。

○委員長（広地紀彰君） 本間副委員長。

○副委員長（本間広朗君） 本間です。きょうはどうもありがとうございます。先ほど、ふれていたのですけれども萩野地区で私たちこのメンバーでいろいろお母さんから意見、要望を聞いて、私が担当になっているのでくしくもその議会に出す報告書を持ってきて、いろいろな意見、要望も聞いてこれから委員の方に見てもらおうのですけれども、その中に私が聞いてまとめたいたらお母さんたちは本当に自分を犠牲にしてまで子供のことを考えていろいろやっているのだなと感じて、本来であれば父親もそこに参加して先ほど言っていたけれど、父親がもっと積極的に参加してお互い助け合ってやるべきだと、お母さんの負担も軽くするという点も、その他にもいろいろあるのですけれども。やはり、なかなか現状はそうではないと私は思います。これから国も働き方改革とかなんとか言っているけれど、おそらく都市部ではそうなるかもしれないけれど白老ではなかなかそうはならないと思います。そういう中谷さんがやっている現状は、もっとも負担が大きくなると私は思っています。ですから、父親に関して中谷さんが感じておられること、私は二人で子育てを本来して助け合っていくべきだと、お助けネットにお世話にならないくらいのそういうのがあればいいなと思っているのですけれども、現状は違うけれど。中谷さんの気持ち。それと込み入った話になりますけれども、実際に今そういう現場にいて、これから母親の子育てのストレスが大きくなると思います。例えば虐待があったとかネグレクトがあって、そういうのを防げたとか、おそらく先ほど言いましたように本当はしたくないのだけれど、どうしてもストレスで子供にそういうことをしてしまうと、本当はいいお母さんなのだけれど。当然そういうふうにならないように思っているいろいろやっているのですけれど。言える範囲で、その現状を。なぜそういうようになっていくのかというのは私たちも厳密にはわからないのです。一番の父親の参加もそうですけれども、虐待というのは子供が小さい頃からそういうことになるので将来的にもいろいろ影響が出てくるので、そういうようなことにならないような対策もそうですけれども中谷さんたちはどういうふうなことをやっているのかお聞きしたいと思います。

それと提供会員のことなのですけれども、託児サービス講習会を受けた方となっていますけれど、実際にどこかで講習を受けてやります、ただ私やりたいですと言ってやれるものではないと思いますので。その辺のところもお聞かせいただきたいと思います。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 深くて難しい問題のご指摘ありがとうございます。まず、簡単なところから子育て支援サービス講習会は女性労働協会というところがファミリーサポートセンター事業の保険を提供していたりするのですけれど。その女性労働協会ではこれだけの講習をなささいというある程度の水準を出しているのです。それにのっつて私たちお助けネットのほうで子育て支援サービス講習会というのを企画して昨年度から6回、年大体6月から7月にかけて週一で6回行っています。時間は1回、3時間程度やっております。それでもファミリーサポートセンターの水準には届かないので実際にうちの活動に参加したいと言ってくださった方にはさらに追加して個別にさらに6時間くらい行っています。ファミリーサポートセンターというのは、子供さんを預かるものなのできちんと支援サービス講習会は受けていただくということが前提になります。

次に父親のことなのですが、実は私も25年ぐらい前にもまずはお父さんたちへの働きかけが大事だと思って、子育て通信の父親版とかもだしたりしたこともあるのです。なかなか変わりませんし、上から目線で言ってもなかなか難しいところがあります。先ほど、都会などで今、パパプロジェクトですとか育ボス宣言といって役場を中心にファザリングの安藤哲也さんと呼んで、役場のまず人たちに父親が参画することでどれだけ子供の発達にいいのかとか、いろいろなことを話されて宣言されるのです。白老町も育ボス宣言、つまり上司が子育てをしている世帯が帰りやすかったり、父親に乳幼児期が大事だから正直言って子供は乳幼児期が大事なのです。でもお父さんたちは小学生ぐらいになったらPTAの役員してとか、それは申し訳ないですけど子供の発達自体にはそんなに影響ないのです。そこではないのだよというところがやっとなら脳科学の発達でわかってきたので、乳幼児期にどれだけ父親に子供の発達を理解してもらって、その時期に家庭を大事にもらうことがどれだけ大事かということがやっとなら少しづつ行き渡ってきたので。そういう育ボス宣言的なことは大都会にあっていることかもしれないけれど、私は白老町でもやったほうが良いと思います。それが行政なのか、経済界の団体なのかわかりませんが、そういう宣言を出すというのも社会を変えていくというの上からと下からと両方やらないとだめだと思うので、絶対にそれも必要だと思います。あとは、そういうことをすることによって臨床学的な子育ての知恵、虐待についてもしつけと体罰は違うというのだから、この30年前から何回も言っても社会の中枢に男性の方たちに私が言われたことと云ったら、「でも中谷さん、俺どれだけ殴られて育ったと思う」とか、そういうことでしたから。それが、この10年です。大分変わってきたの。公の場で言わないというだけでも全然違います。しつけと体罰は違うのだということを、それを上からも下からも言ってきて悲しい事件も起きて、やっとなら少しづつ変わってきたということです。父親も母親も子供の発達を知ってそこがうまくいかないこと多いけれど、なんとか乳幼児期の家庭を温かくしてやっとならだめだということだ、まだまだしょうがないのだ忙しいのだからという言葉でやり過ごされているのが白老の実態ですから。そうではないのだと、そこは本気でやろうとしていくということが大事だと思うし、私はこんなに長く生きてきたら変わっていくのだと思っていますので、虐待、体罰のこと一つにしても、ですから、そこを突っ込んでやっていくことは父親のことも必要だと思います。今の虐待のことも同じです。ただ、実際にひどいネグレクト、

虐待と言ってもものすごく幅があると思うのです。グレーゾーンの家もある。やはり経済的な問題、ひとり親家庭の大変さもありますけれど、ひどい身体的な虐待になっている部分は世代間連鎖が強い。その親御さんも家庭での食べる、遊ばせる、寝せる、生活リズム大体こんなものだというのを経験してきていないのです。ですから、無理なのです。私も訪問型で行った家庭、今まで9年間のうちで5件はものすごいネグレクトの家庭入ったことがあります。希望して行くのですよ。ということは希望して行ったのに、かなり不衛生だったりするということは、これで人を呼んでもいいと思っているということです。それは、どんなふうに迫っていたらいいかということなのです。悩ましいです。それからもう一つ大きな理由が、世代間連鎖のもう一つは親の精神的な病です。ここがかなり多いです。だとしたら専門家が入っていくことが必要ですし、それと世代間連鎖にしても親の精神的なものにしても、地域とかある程度の行政でできることというのはファミリーサポートセンターでやっていてよかったなと思うのは手伝いができるのです。もちろん子供の面倒がほとんどなのですけれど、少し簡単な家事とか親がいても行くということもあるのです。ものすごく大変で親が精神的に弱っていたら、私も1回だけやったことあるのですけれど、お風呂から上がったときにおばあちゃんのようにその子を受け取ってやってあげるという、世話というの少し入り込めるのです。なので、もしできることがあるとしたら、ただ相談にのってあげたり、いい子育てを教えただけで、むしろ相談してもだめなのだと思うだけなので、手伝うよということが必要だと思います。そういうおうちには。手伝うよということが今のところギリギリ、少しだけファミリーサポートセンターでできるだけなので、もう少し専門的に訪問型の養育支援とかも国の事業ではあると思うのですけれども。もう少し、そういうので家事手伝いだったり、子供と親がいても行ってほとんど安くできるとか、そのようなことがないと外の手は入らないと思います。

○委員長（広地紀彰君） 本間副委員長。

○副委員長（本間広朗君） 丁寧ありがとうございます。大体はそういう感じでやっていくのですけれど、託児所とか子育て支援はいろいろこの間に意見を聞いていたら、やはり地域にあったほうが私は本当にいいと思います。例えば萩野はある、竹浦、虎杖浜、白老。やはり足に困る。なかなか子供を横に運転して行けないということがあって、ですから元気号とかデマンドありますけれど、そういうのを施設の前に停めてそこで乗り降りして例えば預かりとかして、そういうのをやりたいという意見もあったので、行政のほうが本来であればそういうふうにどんどんやっていかなければならない、私たちもそれをもっと押し出してやらないとだめな部分あるのですけれど。そういう部分で今、感じられているところ一言お願いします。

○委員長（広地紀彰君） 中谷代表理事。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） まさに最近もスタッフと話題になった点です。車が2台ないとなかなか、お母さん昼間に使えるという状態ではなくて、そうならない家庭がかなり多いと思うので、それで実は10年くらい前になるのか、すすく3・9ができてすぐの頃、何とかすすく3・9の近くに元気号を停めてもらえないかということで行政の方も検討してくれまして、それで町立病院の脇の細い道、本当はあまりよくなかったのだけれど通して手を挙げれば角のところ降りられるようになったのだけれど、やはりそれでは誰も降

ろしてくださいと言わないのです。ですから今、副委員長さんおしゃったように、やはりすすく3・9の前もしくは、すすく3・9の場合は駐車場が広いので入っていただいたり、あと子育て支援ピヌピヌの前、そこを入れていただくことで随分違うと思います。時間のやりくりなどもあるとは思いますが、もう少し身動きできるような小さなものでもいいので、あったらいいかなとは思っています。

○委員長（広地紀彰君） 1点、私のほうから最後に実はこのようなお話、まとまって伺うことができるの本当に楽しみにしていました。さまざまな取り組みの中で家庭の困難にふれる機会が相当多いのかなど。そう訴えかける温かいまなざしを感じまして、ただ運営上もいろいろと提供会員のことも含めて先行きに対しても、いろいろと煩いありますし、また家庭のいろいろな困難に向き合う中で決して楽な活動ではなかったと思うのです。それをここまで四半世紀といった中で続けていけた元気の源、そして今後そういった活動に対してまちが手助けできることがあれば、もしまちに対して要望があればお伺いしたいなと思っていました。

中谷さん。

○NPO法人お助けネット代表理事（中谷通恵君） 温かいお言葉ありがとうございます。まず、まちへの要望というところでは連携をしていくということを今までもしてくださっているのですけれど、個人情報などのやりとりというのは非常に難しいとは思っていますが、そこら辺の私は勉強不足なのですけれど、本当にその家庭が少しでも子育ての力をつけていけるような方向に向かうのであれば、信頼していただいて連携を強化させてもらえたらありがたいなというふうには思います。先ほどの来、ひろばの常勤スタッフの件ですとか、あと提供会員へということでももちろん人件費の面については厚くしていただいたほうがありがたいです。それは私を含め最初にお助けネットを立ち上げたメンバーというのが、やはりそれまで全てボランティアでやってきたところからの活動だったので、今まで十分やれてこれたと思うのですけれど。途中、認めていただいて人件費を減らさないで、むしろ少しずつふやしていただいています。そこもありがたいと思うのですけれども、次の世代に渡すときに仕事にならないと、なかなか継続していくということが難しいなと、正直思っているところです。

それと、なぜこのようにやってこれたかというとは実は、そんなに大変だとは思っていません。全くの私の個人の感想ですけれど、先ほどの山田委員のときにお話しましたが、まさか私がボランティアするなんてという人間だったのです。ただミニコミ紙を発行したり、まずは我が家が事務局になって託児をやったり、適当にどこかでひろばをやったり、うちでおばさんちという集まりをやったこともありました。何でそういうことをやったのかといたら、子育てしている親御さんがみんなせっぱ詰まっているのです、中谷さんのおかげでそのときに、こんなに頼りにされるということあるのかなど。振り返るとそれです。今はスタッフがみんな新しいアイデア出してどんどんやってくれていて、スタッフが中谷さんいてくれるからやれると言ってくれているので結局は人に頼られる喜びです。きれいごとには聞こえるかもしれないけれど、それ以外には考えられないです。あとは家族の理解です。

○委員長（広地紀彰君） ありがとうございます。皆さん、まだまだおそらく思いもあろうかと思うのですけれども、大変お忙しい中、時間を縫ってこのような場を設けていただきまし

たので、これをもちましてNPO法人お助けネット代表理事の中谷さんとの懇談は終了いたします。本当にお忙しい中、貴重なお話ありがとうございました。

暫時休憩をいたします。

休 憩 午前11時18分

再 開 午前11時28分

○委員長（広地紀彰君） 休憩を閉じて会議を再開いたします。

前回も子育て支援室には丁寧にご説明頂いていたのですが、今後の子育て支援事業計画の取り組みについて担当課から説明をお願いいたします。

渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） 本日はお時間とっていただきありがとうございます。前回、所管事務調査でお配りした資料の13ページになります、最後のほうのページになりますけれども、今後の取り組みということでお話しさせていただきました。子育て支援室として大きく3つの課題を取り上げまして、それに対して具体的な内容で取り組みを載せていただきました。きょうはさらに、そのことについてもう少し深く話していきたいと思います。

前回、お配りした資料の13ページなのですが、主な取り組みで3本のうちの1つ目、受け入れ体制の強化というところですが、課題として今、保育園の未満児さんゼロ、1、2歳児の利用が多くなってきていまして、この受け入れをするためには配置基準ということで保育士さんが多く必要になっています。ただ現状として保育士の不足が叫ばれる中、白老でも保育士さんを確保するのが難しい状況です。現状では、何とかどの園でも受け入れ体制を整えるように保育士は確保しているのですが、これ以上をゼロ、1、2歳児がふえるのであれば、さらに確保が難しくなるだろうというところは考えられるところです。そのために町立の保育園もそうなのですが、私立の保育園も保育士さんを確保できるために、あらゆる情報があるときは各園にも情報提供に努めてはいきたいなというふうには思っています。

②休日扱いの充実ですが、ファミリーサポートセンターの利用状況などを見ますと、休日に託児を依頼する件数がここ数年でふえてきている状況です。親のお仕事の関係だと思えます。シフト制で日曜日がお仕事のご家庭もいっぱいいるということで件数がふえていると思えますけれども、今後は休日の預かり体制を整備していかなければならないと考えております。本日、お配りした資料に近隣状況の実施状況を載せておりますけれども休日保育、白老町は今のところやっておりませんが、近隣の室蘭市、登別市、苫小牧市では実施しております。胆振管内では東胆振では安平町が実施しております。受け入れ児童については安平町が1歳児未満でも10カ月以上のお子さんを受け入れているのですが、ほかの市では満1歳以上のお子さんを受け入れているというような状況になっております。実施箇所数を見ていただくとわかるように、それぞれ市でも1箇所であったり、2箇所であったりということで保育士の確保などが難しい現状があって、実施しているのが少ない状況になっているというふうには思っております。とはいえ白老町もそういうニーズがあるということで今後、受け入れ体制は整備していくように検討していく考えであります。

③の放課後児童クラブなのですが、実施状況を載せております。白老の現状としましては平日、午後6時までの受け入れなのですが、この児童クラブの受け入れ拡大もニーズが多くなってきております。保育園が基本6時半までの預かり、延長保育をすると午後7時までの受け入れをしているのですが、児童クラブだけは6時までということになっています。こちらでも支援員さんの確保が難しい、そのやりくりもあって時間を延長したい気持ちはあるのですが、現状としては延長するのが難しい状況になっております。ただこちらでもニーズに対応できるように今後、時間の延長は検討していきたいと考えています。最低でも保育園の退所時間6時半まで、あと30分の拡大はできるように考えております。

主な取り組み、大きく2点目の地域子育て支援の充実です。①SNSで発信する提供提供の充実ということで今の若い世代の親御さんたちはSNSの利用する回数が多いということで、情報提供にはいいツールかなと思います。このSNSを活用して情報発信できるような体制を今後、検討していきたいなと思います。

②の相談機能の充実と③子育て世代包括支援センターの設置なのですが、切れ目のない相談支援体制の確立ということで31年度、包括支援センターを設置する予定でありますが、相談機能も充実させて、みんなが利用してもらえるような体制、孤立化しないような体制を整えていきたいなと思っています。子育て世代包括支援センターの実施状況もきょうお配りした資料に載せておりますけれど、室蘭市と苫小牧市はすでに実施しております。厚真町も昨年4月から実施しております。ほかのまち、登別市もまだ包括支援センターという形では立ち上げはしておりません。白老町はことしの7月なのですが設置の予定しております。

3点目の発達を支える環境づくりです。①の子ども発達支援センターの機能充実と②の関係機関の連携強化を上げました。最近、発達の遅れとか少し要配慮の子供さんがふえてきているという実態があります。保育園などでも障がいとまでは言わないまでもグレーゾーンと言われるようなお子さんがふえてきて、多いところではお子さんの3分の1ぐらいが経過観察が必要になってきているような状況もございますので、その発達を支える環境づくりというのが今後すごく求められてきていると思います。そのうちの1つ、発達支援センターの機能充実ですが、再来年度32年度末までには受け入れ体制等を整備するということが求められておりますので、機能充実に向けて今後、検討していきたいと思います。その中の1つとして保育所訪問等も考えております。療育が必要な親が発達支援センターのほうに行って療育を受けるようなやり方を今しておりますけれども、なかなかお仕事とかの関係で発達支援センターに連れて行けないということも確かにあることはあるので、保育園のほうに発達支援センターの職員が向いてその療育をするというような体制も今後とっていききたいなというふうに考えております。あとは関係機関の連携強化で発達支援センター以外の連携強化ということで、ここには学校も含まれておりますけれども、就学にあたっての連携を密にして子供の発達を途切らせないようにうまく引き継ぎができればいいかなと思っています。

今、考えている主な取り組みの3項目についてご説明申し上げます。

○委員長（広地紀彰君） 今後の主な取り組みについての補足の説明ですので、ここに対して何か委員のほうから質問等ありましたらどうぞ。

氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 1点だけお伺いします。子育て世代の包括支援センターの考え方なのでですけど今後、苫小牧市に児童相談所の分室ができるという話を聞いておりますけれども、そことの連携については白老町とどういう形なのですか。例えば孤立化しない対策だとか、そこで子育てに悩んでいるお母さん方との連携みたいなもの、児童相談所との関係性というのはどういう形をとられていくのかなというのが頭にあったものですから、お伺いできたらと思います。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） 今お話ありました苫小牧児童相談所の分室なのでですけども、まだ正式に私たちのところにも通知が来ていなくて、はっきりわからない部分が多いのですけれども。おそらく管轄としては苫小牧よりも東側の胆振、日高地区の担当のところになると思うのです。おそらく白老は室蘭児童相談所の管轄になるのではないかなと思っています。ことし、設置予定しております包括支援センターなのですが妊産婦の時期から子育て期にわたるまでの支援ということになりますけれども、その中の一つでいろいろな母子保健の支援のほかに孤立化防止とかということも大きな目的の一つでありますので、児童相談所の連携と言いますと例えば孤立化して養育不安とか抱えていて、うまく養育が困難になった場合とかは、そのときは母子保健との連携の中で適切なアドバイス等々はしていくと思いますけれども、その先に例えば虐待行為が発生してくるとか、そういうことであれば当然、児童相談所などとの連携も必要になってくるかなと思いますけれども、まずは児童相談所とのかかわりとなれば、あくまでも虐待までに至るといような状況が発生したときには連携は当然ながら必要になってくるという状況かなと思います。

○委員長（広地紀彰君） 氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 氏家です。最近、誤った子育てというか、そういったことがいろいろな報道機関の中で例えば子供を死に至らしめるだとか、そういった部分があります。今こういった説明を受ける前にも、お助けネットの中谷さんともいろいろ懇談させてもらったのですけれど、そういったところの活用をされるお母さんたちがどんどんふえてきているというお話も聞いています。その中にはいろいろな悩みを抱えて来られる方々もいらっしゃる、そこで一番鍵になるのは情報公開の問題だとか、そういったところが一番大きなネックになるのかなと思ったりするのです。中谷さんたちのいろいろな活動を通す中で例えば行政とのかかわり方、行政からの情報提供のあり方だとか、そういったものも今後必要になってくるのではないかと、よりよい子育て支援をするために。今後の関係性のつくり方というのは重要になってくるのだと思うのです。なにせ今のこの個人情報の問題というのは、なかなか難しいところもあるのでですけども。やっぱり、まちが本気になって取り組まなければ、そういったところもサポートできないのかなと思ったりしたものですから、児童相談所が今まで室蘭管轄であったものが分室として苫小牧市にできるという話も頭に入っていたものですから、それも含めてお伺いしておきたかったなと思いました。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） お助けネットさんとは定期的に話し合いの場を設けたりとかしています。年に3回、4回と話し合いの場を設けて、その中では取り組み内容の確認とか次年度予算の話し合いとかもしているのですけれども、その中で私たちのほうで町から委託している事業のファミリーサポートセンターとかの取り扱いの中で気になるようなお子さんなどがいたときに、その場で情報交換をしたりとか当然、情報厳守はしますけれど。個別のケースではないのですけれど、そのような中でお話をしたりとか、支援の必要なお子さんがいたときには情報をもらったりとかというようなことはしています。

○委員長（広地紀彰君） 氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 氏家です。いずれにしても行政と本当に密な関係性をつなぎながら、行政はそれをサポートしていく、活動団体はそういったものを受け入れながらよりよい活動につなげていくという、そういう関係性というのはすごく大事なことだなと思います。私たち29年度の議会懇談会などで個人情報の取り扱いの中で地域の見守り活動だとか、いろいろなものが問題視されてきて今だからこそ白老町としての個人情報の取り扱い、いい意味での取り扱い、活動団体の支援のあり方というか、よりよい活動にしていくためのそういう仕組みというのは当然必要になってくると思いますし、今までもいろいろな相談ごとの中で支えてきていただいたのではないかなと思いますけれども、今後さらに一歩進めた形の中でしっかりお互いが活動しやすい、そして子供たちの養育をしっかりと支えていけるような活動をしていく支援が行政のあり方だと思いますので、ぜひその辺はしっかりやっていただけたらと思います。

○委員長（広地紀彰君） ほかにありませんか。

山田委員。

○委員（山田和子君） 山田です。1点目がこの一番最後のページの子育て支援機関体系図の中に7月に設置予定の子育て世代包括支援センターというのは、どの位置に入ってくるのかというのが1点と。ことしゴールデンウィークが10連休ということで、本町における子育て支援の体制というのはどのようにするのか、その2点お尋ねします。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） まず包括支援センターにつきましては、体制としては子育て支援室と健康福祉課の保健師のいるグループと一体的に実施するという体制です。子育て支援室の子育て支援グループが包括支援センターの役割も担うということで、ここに子育て支援室のところに包括支援センターが設置されると考えていただいていると思います。それと健康福祉課との連携ということで実施いたします。

そして、もう1点の10連休の取り扱いなのですが、この10連休の中でお仕事される保護者の方もいらっしゃると思います。それで町立の保育園は通常年だったら勤務のある30、1、2日この日は保護者の要望に合わせて要望が多ければ開設しようというふうに考えています。要望の把握については今後、行うものですから今しっかりその3日間必ず開けますということにはならないのですが、できるだけその要望に答えるように開けようかなという考えではあります。それは保育園に限らず、児童クラブも同じです。あと私立の保育園等に関しても今回は特別な措置ということで休日の預かりをしたときには通常の運営費のほかに加算が出たり

とかということも今後あるようですので、そこら辺を活用しながら私立の園も保護者ニーズに対応できるように開設してもらうようお願いはしようと考えておりました。

○委員長（広地紀彰君） 森委員。

○委員（森 哲也君） 森です。受け入れ体制強化のところで放課後児童クラブについて1点確認したかったのですが、6時半まで検討していくということなのですが今、平日と長期だと6時までになっているのですが土曜日だけ5時までになっていまして、今後の延長の方向性としては土曜日は含めず、まずは平日と長期だけで延長していくのか、この考え方を伺いたしたいと思います。

○委員長（広地紀彰君） 藤元主幹。

○健康福祉課子育て支援室主幹（藤元路香君） 土曜日ですけれど、最初に5時に設定したのは保育園のほうも長くやっているところもあるのですけれど、5時までのところもあるので、それに応じて設定したのですけれども、今のところは土曜日は5時で考えないで平日のときを6時半までを考えていますけれど今後、私立の保育園とかで開設の時間が5時以降、6時とか6時半ぐらいまでやっているところもあるので、今後そちらのほうも検討はしていかなければいけないかなというふうには捉えております。

○委員長（広地紀彰君） ほかにありませんか。

山田委員。

○委員（山田和子君） お尋ねしたいのですが先ほど、要配慮のグレーゾーンのお子さんが非常にふえているということで、その原因というのはもし捉えられていたらわかりづらいとは思いますが、私は最近のスマートフォンの普及が親子共々にあまりよろしくない影響を与えているのではないかなというふうに考えているのですけれど、まちでは検診のときに2歳まではビデオを見せないというような冊子も配布しているとお聞きしているので、それはいい取り組みだなと思っているのですけれど、もう少し強化したメディアに対する取り組みというのは今後していく予定があるのかどうか、お尋ねします。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） メディアに関しては正直、私たちも難しいな。一番は保護者だと思っはいるのですけれども、保護者にどうしたら子供の発達に影響を与えるから、例えば使うときにはルールを決めるとか、そういうのを本当に周知したいと思うのですが、なかなか周知する場を設けてもなかなか参加する人も少なかったりとかということで、保護者自体があまり問題意識を持っていないところもあるのかなと捉えられます。意識を変えるのはなかなか難しいかなとは思っはいるのですが、本当に私たちのほうとしてはメディアに関しての子育てにいろいろな影響を与えるということを言っていくような機会をふやしていきたい、参加人数は少ないにしても、そういう機会をどんどんふやしていきたいとは思っています。出前講座等で要望があれば、いつでも行ってお話をすることはできますし、要望がなくてもこちら側からもそのことについてはお話をしていきたいと思っています。

○委員長（広地紀彰君） 山田委員。

○委員（山田和子君） このことはメディアに関しては健康福祉課と連携していかないとき

ない取り組みかなと思うのですけれど。ただども先ほど、中谷さんも言葉でおっしゃっていたけれど上から目線で正しいことを言っても結局、本人にすんと落ちなければスマートフォンを見てしまうし、子供にもうるさかったらスマートフォンのゲームをやらせてしまうし、それが1歳でも2歳でも興味を持たばユーチューブの動画とか見せてしまうと思うのです。だからこそ、くどいぐらいに今おっしゃっていた出前講座のような機会を持って、話し合うことで自分の中でそういうことに関する情報処理をしながら成長していくことの繰り返しをしなければ変わっていかないと思うのです。その繰り返しをしていく作業の中で、活用できる団体、連携していける団体というのは町内会含めて、おじいちゃん、おばあちゃんに対しても自分はスマートフォンできなくても娘や息子や孫はスマートフォン持っているよねという話から教育ができていくと思うのですが、そういう機会をつくらんとことというのは本当にこれから少子高齢化のまちづくりの中で大事なことになるっていくというふうに考えているので今、所管として子育て支援のことやっているので一般質問のときに高齢者に対しては今と同じようなことを言うのですけれど、子育て支援で所管としてるので子育てに関しては一般質問の中でないつもりでいるので、今ここで改めてお聞きしているのですけれど。連携しながら調整するというか、そういう取り組みを今後も考えていってほしいなと思うのですけれど、室長としてのお考えなり、見解なりあればお聞きしたいと思います。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） 山田委員から貴重なご意見だったと思います。地域との連携というのは、そこまで今までは考えていなかったです。本当に子供自身、保護者向けにどうやったらそれを周知できるかなというふうに考えてはいたのですけれども、なかなか難しいところもあれば地域の方たちにもスマートフォンの影響等について知っていただいて、みんなで子供にかかわっていくことが重要なのかなという今、気づかされましてありがたいなと思います。今後、保護者や学校だけの枠に捉われずに広く地域の人も含めた中で、そういう対策できればいいかなというふうに思いました。ありがとうございます。

○委員長（広地紀彰君） ほかにありませんか。

氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 放課後児童の受け入れ体制だとか、いろいろなものがあります。その中で一番ネックになるのが保育士さんの確保だということで、保育士さんの確保をどうやって具体的に進めていくのかというのが大きな問題です。そこがしっかりできなければ、理想はこうなのだけれど保育士さんがいないからできませんみたいな話になってしまいかねない、大きな課題だなと思うのですけれど。そこについての考え方を、確保に向けての具体的な取り組みについて伺います。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） 保育士の確保は、資格を持っている方がいればその情報をいろいろなところから収集するぐらいの取り組みしかなかったのです。今後も確保については有資格者がいれば、その人たちに働く意思があるかどうかということも確認するというのはまず第一かなと思いますし、もし職場復帰とかに不安を抱えている人がいるのであれ

ば、それに向けての研修なども必要になるかなと思いますので、それはどれだけの人がいるのかということにもよりますけれども、復帰に向けての体制も今後、整えていかないといけないのかなと考えております。

○委員長（広地紀彰君） 氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 氏家です。町内にいらっしゃる保育士資格を持っていて、ただ今現場にはついていないよという方々の情報というのはまちで押さえられている。今後、情報収集に努めるということなのか、その辺だけお聞きします。

○委員長（広地紀彰君） 渡邊子育て支援室長。

○健康福祉課子育て支援室長（渡邊博子君） 今、押さえている情報というのは町立保育園にかかわっている保育士の知り合いであったりとかというような情報の程度しかありません。ですから以外とあの人も持っていたのだねということも中にはありますので、内輪の情報にこだわらず大きく有資格者がどのくらいいるのかという把握は必要かなと思います。手法としては、いろいろなツールを使いながら例えばそこら辺の保育士バンクみたいな形とかで立ち上げるかどうかは別としても、そのような方法で有資格者を把握する方法があればそういうのも有効かなと考えています。

○委員長（広地紀彰君） ほかによろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○委員長（広地紀彰君） 以上で説明のほうは終わらせていただきたいと思います。
暫時休憩をいたします。

休憩 午後 0時01分

再開 午後 0時02分

○委員長（広地紀彰君） それでは休憩を閉じて会議を再開いたします。

今と前回に引き続きまして所管事務調査を進めてまいりました。2月5日の質疑については子育ての支援拠点の体制の充実などを森委員からご意見頂戴し、氏家委員からは地域での支えていく姿といったことで上位計画との具現化の部分についてのご意見頂戴していますし、本間副委員長からはニーズに対してどういうふうに向き合うかという点、私からのほうからも連携や発達困難や家庭の困難等にどう向き合うかという話を5日にいたしました。また本日も中谷氏を招聘したり担当課からも今後の取り組みについてのご意見頂戴する中で、山田委員のほうから提供会員これからどうやって確保を図っていくか、まちづくりのあり方としてのご意見頂戴したり、さまざまな連携を深めていくべきだという、そういった部分。森委員からは、すすく広場の支援体制のあり方についてご意見頂戴したり、氏家委員からは発展的な子育て支援のまちづくりに対してのビジョ的な観点からのご意見や保育士確保の今ご意見頂戴したり今回、担当課からの説明の中でメディアに対する強化の部分、そういった観点からの啓発活動もこちらからの働きかけを強化していく必要があるとのご指摘も頂戴しておりました。ほかにも、たくさんのご意見頂戴していたのですが、こういったご意見をもとにして所管事務調査の報告をさせていただきたいと考えております。さらに何かこの場で時間も若干限られている

のですが、補足やこういった観点でまとめていくというご意見があれば、最後に伺いたいと思うのですが。

山田委員。

○委員（山田和子君） 山田です。財政厳しい中ですが、すぐにできる例えばおむつの交換の場所の確保ですとか、すぐにできることはすぐにやっていただきたいと思うので、今おっしゃった中に入っていなかったように思うので、そういったことも入れていただけたらいいなと思います。

○委員長（広地紀彰君） 産業厚生分科会で取り上げられた意見箱だとか、さまざまな具体的な要望事項あったのです。組織的な違いはあるのですけれども、すぐにできることはすぐに取り組みとそういったようなことは所管事務調査の意見としても十分に踏まえるべきと考えますので、まずそういった部分踏まえさせていただきたいと思います。ほかにありますか。

氏家委員。

○委員（氏家裕治君） 氏家です。委員長、今のこのテーマから外れるのかもしれませんが、今、委員長が言われた言葉というのはすごく大事なことだと思うのです。本間副委員長が今いらっしゃらないので、分科会等々で出された意見、これを常任委員会に持ち上げて常任委員会の中で分科会で取り上げられたものについての取り扱いを実際にやってるのですけれど。そういったことを一つ、段階を踏んだ中でやられると常任委員会として、分科会は分科会としての取りまとめが必要でしょうけれど、常任委員会の子育て環境についての部分では分科会から取り上げられたもの、これについて行政としっかり今まで議論してきたつもりでいるのです。そういった段階を踏んだほうが委員長もまとめやすいのではないかなと思ったので。意見としてお話しさせていただきたいと思います。立場は違うというのではなくて、立場は同じなのです。一度そういった分科会からの意見をもち上げて常任委員会で協議したという形をつくるべきかなと思ったりもしたものですから一応お話だけ。子育て支援の環境整備については多方面から事業者さん、それから行政の考え方、それに通所されている方々のご意見いろいろ聞いた中で今回この環境整備について今後どうあるべきなのかということ常任委員会としてしっかり報告していただければ。今、委員長が言われたとおりのことをこういうことだから、しっかり環境整備をしないといけないのだというものが根っこにあれば、それでよろしいのかなと思います。

○委員長（広地紀彰君） 2月1日のトコトコさんとの懇談の中で具体的な要望事項もありまして、ざっくりばらんな雰囲気の中でどうやって踏まえていくかといった部分、やはり常任委員会として分科会との整合性も図りながら今、本間主査のほうでまとめられていると伺いましたので、そちらのほうもきちんと踏まえながら具体的なご意見についても記載をさせていただいて特に今、山田委員からありましたとおりにすぐにできることもありましたので、そういった部分は常任委員会の所管事務調査の報告として訴えていく必要があるのかなと思います。

森委員。

○委員（森 哲也君） 中谷代表理事の話聞いて印象に残ったのが、育ボス宣言の話もされていて休憩中に山田委員ともお話しさせていただいて、確かに男性だとなかなか今まで子育て

のこと学んでこなかったなとういうのを強く感じたので、男性の学ぶ環境というのも本当にどこかであったらいいのかなと感じました。

○委員長（広地紀彰君） 今、森委員のご指摘のとおりで本間副委員長のほうからも会議中にそういった男性も参画をより強化していくといったような観点のご意見頂戴していますので、そういった部分もまとめの中でさせていただきたいと考えます。

それでは、そういった意見をもとにして正副委員長で案を作成の上、また改めて皆さんにお諮りをしてまとめて報告をさせていただくというような流れでよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（広地紀彰君） それでは、そのような形で進めさせていただきます。

小野寺主査。

○事務局主査（小野寺修男君） レジメのほうに載っておりますけれど、このあとの日程ですけれども7日になります。7日は、いろいろと込み入っているのですけれども一応、産業厚生常任委員会の協議会というのが入っております、それが終わったあとに所管事務調査ということで日程を取っております。内容につきましては次期、所管事務調査で何をするかということと年間の計画について、お時間を取りたいなと思います。

○委員長（広地紀彰君） それでは、そのような形で進めさせていただきたいと思います。今回のまとめにつきましても、でき次第皆さまにお諮りしたいと思います。何かございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎閉会の宣告

○委員長（広地紀彰君） それでは、これをもちまして産業厚生常任委員会を終了いたします。

（午後 0時10分）